外国籍県民かながわ会議（第13期・第14回）　議事録

開催日：2026（令和８）年11月１日（日曜日）
場　所：神奈川県庁　エネルギーセンター棟　EC会議室２

１　開会

（事務局）

・　会議のルール、会議の録音、欠席者及び配布資料等について説明した。

２　提言案に関する協議

(1)　委員長の挨拶文案について

（柳委員長）

・　提言冒頭の委員長の挨拶文の内容について確認をした。

・　修正の意見はないため、提言の協議に移る。

(2)　生活向上部会－②について

（事務局）

・　前回の会議では、県立高校での母語教育の担い手として、留学生がボランティアまたは補助的な役割で授業に関わってはどうかという意見があった。このことを 11 ページの理由欄のみに追記すればよい、という結論だったが、理由欄と内容欄に書く内容はリンクさせた方がよいと思われるため、９ページの内容欄にも同じことを記載した。

（柳委員長）

・　９ページと 11 ページの記載は合わせた方がよい。留学生やボランティアが授業に「関わる方がよい」という趣旨であれば、「参画を図る」の表現になる。「（関わることを）考えてください」だと、「検討する」になる。皆さんの意見をお聞きしたい。

（挙手で多数決を採った。）

・　「参画を図る」の方が多かったので、この表現にする。

(3)　生活向上部会－⑤について

（事務局）

・　前回の会議で、行政や高齢者施設職員向けのセミナーに含める具体的な内容として、外国人の状況や文化などの背景、受けられる医療や障がい者支援などの案が出たため、それらをセミナーで学んでもらい、安心できる老後のための環境整備をすべきという提言に整えた。
・　修正の意見はないため、次の協議に移る。

(4)　生活向上部会－⑥について

（事務局）

・　19ページの取組の案で、当初介護の技能実習生となっていたところを、制度の変更や多様な在留資格の実態にあわせ、「介護職員」という表現に変更した。
・　20ページの運用上の留意点について、ハリソン委員からの「AIの課題・限界も書き、バランスのとれた提言にしたほうがよい」という意見と、ドン委員からの「ＡＩは人による教育を補完するものであり、対比させたくない」という意見を斟酌の上で、記載を変更した。
・　修正の意見はないため、次の協議に移る。

3　第14期への引継ぎについて

（柳委員長）

・　第14期で何をするかは当期の委員が決めるが、継続の検討事項があればお聞きしたい。

（倉橋委員）

・　ケアマネジャーや訪問介護士との応対のために「介護通訳派遣システム」を作ってほしい。

（柳委員長）

・　他の委員の了解が得られたため、第14期に申し送る。

4　今後の予定について

(1)　最終報告書提出式について

（事務局）

・　12月10日（木）に県庁で最終報告書の提出式を行う。
・　式では、最終報告書を提出するほか、委員長・知事双方による挨拶、

知事との記念撮影等を予定している。

(2) あーすフェスタかながわ 2026 について

（柳委員長）

- シフトの確認。11月29日（日）担当の委員は各自で時間を調整してほしい。
- ブースでは、県民会議や提言の説明、外国語の挨拶ができた場合にスタンプラリーのポイント付与、子ども向けの缶バッジ制作を実施する。
- 缶バッジにする紙には、県民会議の委員の母語による挨拶を事前に印刷しておき、当日イラストを描いてもらう。後ほど各国語の「こんにちは」、「ありがとう」を送ってほしい。
- フェスタは県の多文化共生の推進のために 2000年から実施。県民会議も実行委員会に入っている。外国人・日本人がともにイベントを作ることが特徴。企画を通して知り合い、様々な話ができる場ともなっている。

（王委員）

- フェスタで掲示するポスターを作った。ルビを修正して送る。

5 第13期委員による振り返り

２年間県民会議に参加した感想、今後よりよい会議にするための意見、県民会議の委員に対するメッセージを中心に発表した。

(1) 倉橋委員

- いろいろ勉強になった。自分が考えたことを皆さんに届けられたらよい。ただ提言ができたから終わりではなく、今後しっかり考えてほしい。
- 必要なことを調べるために色々なところに聞いたこともあったし、自分の考えが正しいのか、言っていいのかと思ったこともあった。
- 必要なことがわかったら、続けてプッシュしなければならない。小さな声でも誰かが聞いてくれる。皆でつなげて力をあわせれば、山を動かすことができる。

(2) 愈委員

- （在県枠の）定員が増えるなど、外国につながる子どもの進学に関する状況が改善されてきていると聞き、今後も継続してほしい一方、それで

も提言すべきか悩んだこともある。それでも続けてほしい、という声を出していく。

(3) バ委員

- ２年間ディスカッションなどを繰り返してきた。部会ごとの話し合いやアイディア出し、皆さんのサポートを通して、改善を重ねてきたことは素晴らしい。
- 知らなかった日本語の言葉を学ぶことができた。また、学校のことなど、皆さんの案に書かれた制度を私自身あまりよく理解していなかったので、非常に勉強になった。
- 日本にいる多くの外国人のうち一人が起こした問題でもニュースに流れるようななかで、私たちがどうやってよいイメージを作っていくか。皆さんと考えたい。

(4) 李　方舟委員

- 提案に向けて忙しかった。作成に取りかかり始めた後で、専門家から心理カウンセリングや療育について助言を受けた。
- ２年間で自分自身が経験したことも影響が大きかった。新しい提言を作ったり、今の提言を継続して協議してみたい。

(5) 蒋副委員長

- 前期も含め４年間委員として関わり、沢山の人たちと様々な課題について意見交換をしたことは、とてもよい経験になった。私たち外国籍県民の声を行政に届けることはとても大切だと学んだ。一人一人の意見が社会をよくするきっかけになるということも感じることができた。
- 同じ外国籍県民でも、国籍や文化、生活習慣の違いに由来する価値観の違いがある。皆さんの意見を聞くことで多くを学び、新しい発見ができた。
- ４年間の活動で、すべての課題をすぐ解決することはできないという難しさも感じた。それでも、私たちの「声」を言い続けて、行政と協力していくことがとても大切。この会議で得た経験は、とても大切な宝物。委員の任期は終わるが、外国籍県民として多文化共生社会に向けてできることを続けていきたい。

(6) ストービー委員

- 会議に入った目的は、真鶴町のような小さな外国人コミュニティの代表となることだった。チャレンジもあった。普段日本語をあまり使わないので、私の意見は届いていないかもしれないとも思ったが、提言作りはよい経験になった。提言はみな面白い。
- 意見としては、任期が少し長い。また、もう少しフォーカスして話をしてはどうか。例えば、知事から提示されたトピックを話し合うなど。
- 柳委員長はすごいリーダーだと思う。

(7) ハリソン委員

- いろいろなテーマについて意見交換した。私は当初神奈川県や横浜市の何がどうなっているのかよく知らなかったので、(会議で) 学んだ。
- 資料が大部だと委員が読むのも事務作業も大変になるので、事務方による記録を簡略化したほうがよい。

(8) 韓委員

- いろいろ勉強になった。今期はより具体的な提案になってよかった。
- 今後よりよい会議にするための意見として、前期(第12期)と比べて全体で話す時間をとったり、深く話をしているので、1件当たりの時間配分が難しかったと思う。部会ごとと全体の協議とでどちらも良い部分と悪い部分があるので、(進め方について) 検討していく方がよい。

(9) ドン委員

- 2年間は長いようで短い。県民会議を初めて知ったときは驚いたが、挑戦しようとも思った。
- 作成した提言について、自身は17年間日本に住んでいるが、今でも日本語にコンプレックスがある。留学生などをみても、一番大きな問題は日本語。日本語ができれば、外国人が懸け橋になることもできる。自身の経験から始まったが、他の委員や他の人の意見も参考になった。
- 欠席者に向けて議事録を共有してほしい。
- 皆さんから多くを学び、新しいネットワークを作ることもできた。

(10) 王委員

- 最初はとても不安だったが、委員長のリーダーシップ、国際課の丁寧なサポート、委員の皆様の温かい言葉のおかげで、次第に安心して参加できるようになった。お互いを信頼し、安心して意見を言える、心理的安全性の高いグループだったと感じている。
- また、会議を通じて、様々な分野の知識を学ぶことができた。学んだことは会議の活動だけでなく、外国籍住民としての自分自身の日常生活にも役立つものが多く、本当に貴重な経験だった。
- 提案の一つ目は、公式ウェブサイトに投稿フォームを設け、幅広くアイディアを集める仕組みを作ること。これにより、会議に参加できない外国籍県民の声も拾える。
- 二つ目は、委員長・副委員長の役割の明確化と分担。今期は特に、柳委員長が非常に多くの仕事を担ってくださった印象がある。委員長でなければできない仕事と、ほかの方にも分担できる仕事を整理することで、負担を軽減できるのではないか。
- 三つ目は、早い段階で少人数のグループをつくり、意見交換の機会を増やすこと。大人数では発言を躊躇う方も、少人数なら意見を出しやすくなる。全員が一度は発言できる機会を設けることが大切。
- 四つ目は、初期の提言メモ作成段階での個別サポート。日本語の表現だけでなく、アイディアの整理、論点の明確化、提言のまとめ方を支援することで、会議中の説明や認識のずれを減らし、議論をより効率的に進められるほか、委員の自信にもつながる。
- このほか、次期の提言の仮テーマとして、「外国籍県民の生活段階に応じた社会保障制度の理解促進と学習支援の充実について」を挙げたい。県には外国籍県民の制度理解に向けた理解促進を期待したい。
- この会議に参加して、多様な立場の方々と一緒に考え、意見交換することの難しさと大切さを学んだ。今後も、より多くの声が届き、一人一人の委員が力を発揮できる会議になっていくことを願っている。

(11) 柳委員長

- 県民会議のよいところは提言を出すことだけではなく、会議でつながって「自分たちで一緒にしようよ」となっていくこと。県民会議の委員でな

くなっても、皆さんがそれぞれ声を上げていくことを、職場や他府県などそれぞれの場で、それぞれの方法で続けていってほしい。この経験を活かせるよう、一緒にまた頑張っていきたい。

(12) **李　周殷委員**（欠席のため、事前提出した文章を事務局代読。以下、要旨）

- 県民会議に参加し、多くのことを学ぶことができた。個人的に交流を深めたり、ゆっくりお話ししたりする機会は限られていたが、皆さんの発言を通して、それぞれの経験や考え、暮らしの中で感じていることを知ることができた。同じ日本で暮らしていても、出身や文化的背景、立場によって、見えることや感じることが異なるのだと、改めて気づいた。
- また、共感できる思いや共通する悩みがあることも分かった。皆さんのお話に耳を傾け、自分だけでは気づけなかったことを知ることができたことは、大きな学びだった。この２年間は、自分の視野を広げる貴重な機会になった。
- 一人一人の提言について、委員同士で意見を交わし、修正を重ねながら内容を深めることができた。委員の任期が終了した後も、自分が提言した内容が、その後どのように検討され、実際の施策や取組にどのように反映されているのかを、提言した委員にお知らせいただけるとありがたい。すぐに実現することが難しい場合でも、検討の状況や実現に向けた課題を知ることができれば、任期を終えた後も関心を持ち続けることができる。また、会議で重ねてきた議論が、その後の取組にどうつながっているのかを知ることは、委員にとっても大きな励みになる。
- それぞれの思いや経験を持ち寄り、より暮らしやすい神奈川についてともに考えられたことが嬉しい。この会議で得た気づきやつながりを、仕事や地域での活動にも活かしていきたい。

(13) **松村委員**（欠席のため、事前提出した文章を事務局代読。以下、要旨）

- ２年間、会議に参加し、様々な国籍の方々と意見を交換できたことは、大変貴重な経験となった。皆さんのお話を通して、自分一人では気づけなかった課題を知り、多くのことを学ぶことができた。
- 特に、外国人保護者への高校進学に関する情報提供について、皆さんと一緒に深く考える機会を持てたことは、非常に有意義だった。

・　今後、よりよい会議にするための意見として、外国籍県民の皆さんが日常生活で感じている困りごとや、必要としている支援について、これからもぜひ幅広く声をすくい上げていただきたい。
・　また、会議での議論や提出した提言が、その後行政の中でどのように活用され、変化につながっているのかフィードバックを得られる機会があると、委員のモチベーションも高まり、よりよい会議になると感じる。
・　皆さんとともに考え、学び合えた時間を心から嬉しく思う。今回の経験を通して、会議の内容を深く理解し、自身の想いや考えを的確に伝えるためには、参加者それぞれの日本語の理解度や、言葉を使いこなしてコミュニケーションを図る力がとても大切だと実感した。

６　事務局による振り返り

（事務局）

・　委員の皆さんには、それぞれの事情があるなかで、提言の作成とそのための情報収集をしていただいた。また、当日の協議にも積極的に参加し、議論を尽くし、よりよい提言を作っていただけた。
・　また、所管課へのヒアリングを積極的に行うことで、より実効性のある提言を作成することができたほか、各所管課に、当事者のニーズや提言にかける熱い思いを知ってもらうこともできた。
・　年々、県庁内で、県民会議が重要だという認識が広まり、提言をどう実現したらよいかと考える機運が高まってきたように感じる。それは皆さんの日頃からの活動があってこそ。
・　多くの委員の方が、会議に取り組む動機を「声を上げなければ変わらないから」と語ってくださったことが印象に残る。委員の声で県の取組を動かし、県民の生活がよい方に変わることを期待できる２年間だった。
・　今後の課題として、会議としてどのように提言を作っていくかについて検討したい。今の会議では、一人一つ以上提言の案を考えていただいている。これにより、個人の思いを尊重できる一方、他の人の案を自分事として考えたり、会議が出す提言として、どうまとめていくか考えることが難しく、全体協議に発展しにくい面もあるのではないかと考えている。
・　皆さんの声を受け止めて、どう活かせるか考えていきたい。また、皆さんにも結果をフィードバックしたい。

・　もう少しチームとしての活動ができるとよいのではないか。例えば、提言の数を絞って１つにかける時間を増やすのか、事前にテーマを決めて部会ごとに１つテーマを作るのか、従来どおり一人一つ提言を作るか。皆さんの意見を聞いて第14期の参考にしたい。

（王委員）

・　自分の提言には熱心に取り組めるが、他の委員の提言ではあまり関わっている気がしない。チームに分けて、一つの提言をプロジェクトとして考えるのはどうか。例えば、私が提言を考え、プロジェクトメンバーである二、三人が助言をする。同時に、私は別の委員の提言について積極的に意見や情報収集するといった方法により、提言を広げることができる。

（バ委員）

・　今回、李方舟委員と二人で一つの提言を作った。そのように一つの提言にまとめるという方法もよい。または、テーマを決めて複数のことを話し合うこともできる。学校のテーマでは高校や学生の問題を、情報のテーマでは神奈川県やテレビの問題を話し合うなど。論文のように、大きなテーマの下にサブテーマがあるような形になる。

（蒋副委員長）

・　第12期と比べて委員長の負担が大きい。あーすフェスタや部会の進行などの役割分担を明確にすべきではないか。それぞれ役割を持ちながらテーマに沿って協議を尽くすのが県民会議の委員であるべき。
・　情報部会では、ある程度テーマを絞った。絞らないと個人作業になりがち。
・　継続したい委員が少ない。事情はあるだろうが可能なら継続してほしい。
・　勉強する回やコミュニケーションが少ない。会議が始まる前に県民会議の趣旨や進め方についてのガイダンスがあったほうがよい。
・　物価高騰のなか、謝金についても事務局に再検討してもらいたい。

（ドン委員）

・　同じ領域に関心のある、同じ経験のある委員なら意見ができるが、そうでなければ調べることも難しい。横のつながりがある方がよい。知識のある人に意見交換をお願いすることで、提言をよりよくすることができる。

（柳委員長）

・　自分だけの提言にならないようにするために、オープン会議や懇話会のタ

イミングも含め考える必要がある。県民会議をどうまとめるかだけではなく、提言に関係する人をどう巻き込んで提言につなげるかも重要となる。

7　閉会（柳委員長）

・　皆さんと一緒だから提言ができた。会議は今回で終わりだが、最終報告書の提出式でまたお会いしたい。

以上